

# 活動報告書

報告者氏名: 三ヶ尻あや 所属: 宮崎県立清武せいりゅう支援学校 記録日: 2021年2月10日

キーワード: コミュニケーション

## 【対象児の情報】

### ・学年

高等部3年生 女子(以下 Aさんと表記)

### ・障害名

診断は先天性ミオパチーによる両上肢機能障害、体幹機能障害

### ・障害と困難の内容

肢体不自由 重度重複障がい

## 【活動目的】

### ・当初のねらい

Aさんが高等部卒業後の生活を見通した暮らしや、条件に必要なサービス、制度、支援体制を確保することをAさん主体で進めていくこと。昨年度の実践で行ったコミュニケーション活動をベースに、一人暮らしをする上で支援者・仲間作り、安心できる環境づくりへ広げること。卒業後も安心して生活する為に、支援の連続性を涯にわたり受けていくこと、生活の場、就労先等へ支援が確実に引き継ぎを行い確認すること。学級担任・副担任との日記等の発表の場を設定し、聞き手の支援者は、Aさんを称賛し、自己肯定感を高め、発表等の場を増やしていく。会話の場を設定する手立てとして、教師間でAさんがコミュニケーションを取りたいという気持ちがあり、伝える力があることの実態の共通理解を図る。会話の場としては、学習の中に意図的に学習計画を設定すること、日常生活の中の偶発的な会話の場面においても丁寧にAさんの意思を聞くことが、Aさんのコミュニケーションを高める上で、大切な支援であることの共通理解を図る。

### ・実施期間

令和2年6月1日から 令和3年2月10日

### ・実施者

三ヶ尻 あや

### ・実施者と対象児の関係

高等部1学年時の学級担任、2学年時の学級副担任である。今年度は対象生徒の週1時間の自立活動、作業学習を担当している。実施者は作業学習のT1担当の為、学習目標、学習内容の設定上の理由から、Aさんとマンツーマンでの関わる事ができる時間は限られている。

## 【活動内容と対象児の変化】

・対象生徒の事前の状況

### ○ 身体の状況について

- ・診断は先天性ミオパチーによる両上肢機能障害、体幹機能障害。
- ・先天性ミオパチーを起因とする握力の低下があり、物を握りしめたり、手指に力を入れたりすることが困難である。
- ・医療的ケア対象生徒であり(人工呼吸器の装着、胃瘻、口腔内、気管切開吸引)電動車イスを使用し、要介助。
- ・疲労軽減や側弯の進行予防のため、1時間おきにベッドで横になり学習を行っている。

### ○ 言語理解について

- ・「太田ステージ StageⅢ-2」段階とおさえている。ソーシャルスキルとしての言葉35ソーシャルスキルとしての言葉35-1対人関係に有能な言葉の段階。「はい」「いいえ」「そうです」「ちがいます」「わかりません」「教えてください」「どうぞ」「ありがとう」等をiPhoneで読み上げ機能を使用するとできる。
- ・iPad、iPhoneの「メモ」、「Pages」のアプリで3語文程度の簡単な文章で伝える。  
(例)今日は母と買い物に出掛けました。

### ○ 学習面について

- ・文字を書く意欲はあり、筋力の低下による道具の操作(鉛筆のキャップを外す、消しゴムで消す等)することが困難なため支援を要する。
- ・筆記の際、握力の低下から、斜め線を垂直に書くこと、部品の配置を捉えること、形を捉えることが難しい。
- ・姿勢保持の支援を行い、書きやすい姿勢をとることで、文字を書く動きを引き出せることができる。
- ・既習した漢字の筆記について、正確に書くことができているか教師と確認が必要である。
- ・日記や作文はひらがな、カタカナ、漢字混じりの文章で簡単な感情を表現している。「楽しかったです。」「また、行きたいと思いました。」等のパターン化された文章は書くことができる。

### ○ コミュニケーションについて

- ・人工呼吸器の装着により発語は不明瞭である。学校生活では教師や周囲の人へ自分から伝えることや、言葉でのやりとりはない。ただし、保護者とは送迎の車中で学校の出来事、休日の外出先について等、会話を楽しんでいる。
- ・吸引、水分摂取、排泄、人工呼吸器の電源、日常使用する機器等に関する支援の要求頻度の高いものは、カードによる指示やサインで行うことができている。
- ・筋力の低下により上腕拳上が困難なため、手首拳上やうなずきで肯定の意思表示をし、促されるとiPadやiPhoneに入力して自分のやりたいことを伝えようとする。
- ・iPad、iPhoneで合成音声の読み上げ機能を使用している。
- ・日常の挨拶等はパターン化しているものは「Drop Talk」で挨拶用のキャンパスを作成し、読み上げ機能を活用している。朝の会の司会や係活動に必要な話形を事前に「Drop Talk」のキャンパスに自分で編集ができる。
- ・週末はiPadの「メモ」アプリに写真を添付した日記を作成している。日記の内容は休日の母親との外出について、楽しかったことを伝え知ってもらうことで喜びを感じており、意欲的に教員のiPadにAir dropで日記を送信している。
- ・心地良いと感じるクッションや枕の位置を自らの指示や、首を横に傾ける等、支援者と確認しながら姿勢変換している。
- ・質問等受けると、どのように返答すれば良いのか戸惑ってしまい相手に伝えたいことが正確に伝わらず、誤解されてしまう。

- ・周囲がコミュニケーションをとることに焦点が行き過ぎてしまい、教師からの一方的なコミュニケーションが見られる。対象生徒の気持ちを汲むことが疎かになり、受身のコミュニケーションになってしまうことがある。
- ・日頃の A さんの思考、意見の内容を把握し、A さんの発言を想定してから、教師と確認し合い iPad へ入力し、発言する場面を伝えている。
- ・iPad、iPhone を使用する会話では、自らの言葉を入力することが難しく「楽しかったです」「勉強になりました」等、パターン化した内容で表現する際は、教師が質問の意図に添うように、発表内容に対して支援をしている。
- ・日頃関わっている教師には、興味のある事柄（テレビ番組、イベント、雑誌等）について、iPad や iPhone の読み上げ機能で、自ら質問し、教師とのやりとりを楽しんで充実感のある様子が見られはじめています。
- ・ICT 有無により太田 Stage の評価が大きく変わる。（表 1）

ICT 無	ICT 有
StageⅢ-2 35. ソーシャルスキルとしての言葉	StageⅢ-2 35. 役割による言葉の違い 36. 体験したことを話す 37. 子どもどうしの対人関係を広げる
・対人関係に有用な言葉: 「はい」「違います」を筋力低下のため、小さくうなずく、頭を横に傾げるが相手に理解されないことがある。「ありがとう」は、手話で手の動きは小さいが伝えることができる。	35・36・教師の質問に対して、iPad、iPhone の「しゃべって」アプリを利用し、日記に「(実習後に) あいさつがしっかりできました。質問されたことにしっかり答えることが難しかったです。」と書く→読み上げる。 37 ・LINE で自分から友達と遊ぶ約束「今日、(子ども療育) センターに行くんだけど、一緒に遊ぼうよ。」と連絡することができる。

表 1: 太田 Stage: ICT 有無のソーシャルスキルの評価

・活動の具体的内容

実践 やりたいことを自分で決め、様々な手段で遂行できる力



Simple Mind+

実践 ①

高等部最終学年として、やってみたいリストを A さんがマインドマップにした。(図 1) 昨年度のマインドマップやロイロノートの活動と考え方の変化の大きなポイントは A さんに自己決定能力がついたことにより、自立したい気持ちが高まって自分自身でできることは自分でやっていきたいという気持ちが、自我として確実に芽生えている。そしてこの中の一人暮らしの作文で「入賞したい」ことを、やってみたいことに今できるチャレンジとして行った。

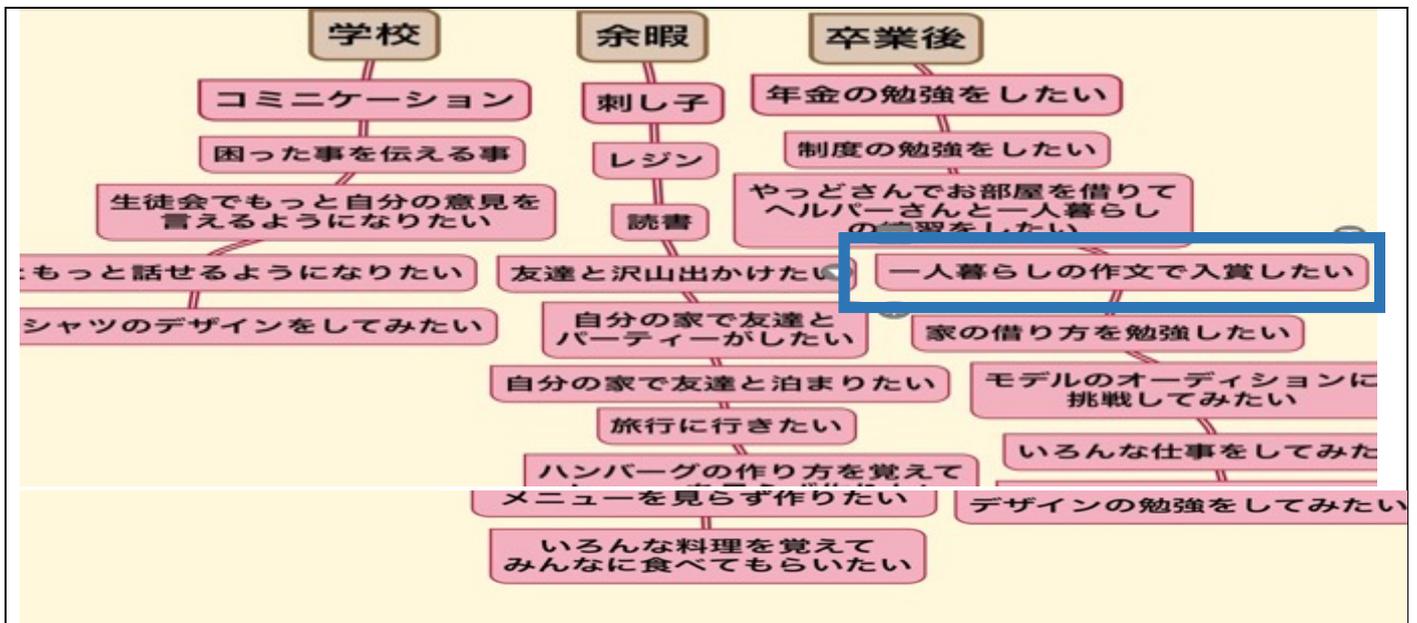


図1: 高等部最終学年としてやってみたいことリスト(1学期)

実践 ②

作文の懸賞品をなんとかしてもとりたい思いがあり、外部の作文コンクールに応募することを A さんから相談を受けた。(図2) 2000文字程度の作文を書くために、疲労を感じずに作文が書けるツールとして「文字数カウントメモ」アプリを使用することにした。(図3) 入力した作文を共有できるアプリで、A さんは自ら、毎日、作文の進捗状況を共有することができた。応募した作文の結果は9月中に発表予定である。

○ エピソード (9月下旬)

A さんから、作文の一次選考が通過したことの報告を受けた。最終審査のスピーチは、プレゼンを作成してスピーチしたいことを実施者に相談し、現在、Keynote に最終審査のスピーチに向けて、プレゼンを作成した。



メモ



文字数カウントメモ

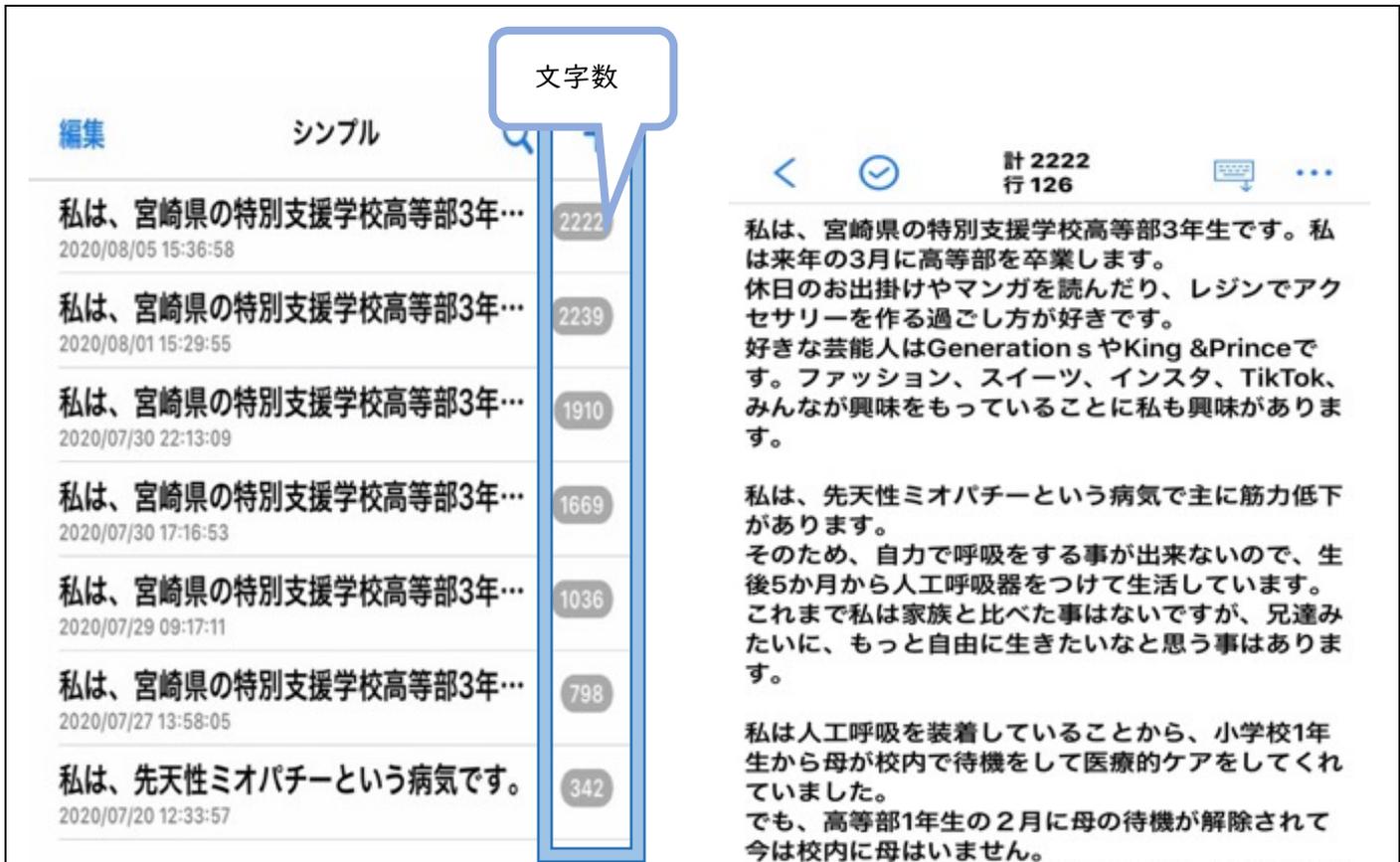


図2:推敲した作文を実施者と共有

私は、一人暮らしをすることが夢です。一人暮らしをしたい理由は自分で予定を決めたい事です。

図3:文字カウントメモアプリで書き上げた作文 (一部抜粋)



縦書きエディタ

図4:掲示用として縦書きエディタで原稿用紙へ印刷 (一部抜粋)

○ エピソード(11月上旬)

最終選考が11月上旬 Zoom で行われ、1次審査を通過した A さんは事前に作文の内容に沿ったプレゼン(図5)を作成し、録画したもので発表した。最終選考当日、Zoom 上で審査・結果発表があり、A さんの作文は最優秀賞に輝いた。(図6) 自分の意思で取り組んだことが、認められたことで、喜びを感じ、自信へとつながったことをその後の A さんとのやりとりで感じ取ることができた。



Keynote



図5:最終選考に向け作成したプレゼン

最優秀賞おめでとうございます！  
 夢の具体性もあり、実現に向けての行動力も素晴らしいと思いました。若さと好奇心溢れるスピーチもとても良かったです。夢の実現に向けて応援しています！

図6:スピーチコンテストの主催者からのコメント

実践③

夏季休業後、「やってみたいことリスト」の取り組めた項目に👉を付けた。マインドマップの「やってみたいことリスト」を進めていく中で、A さん自身が更に、やってみたいことに「ヘルパーさんと出かけた」「ヘルパーさんと話したい」ことをマインドマップに追記した。(図7)

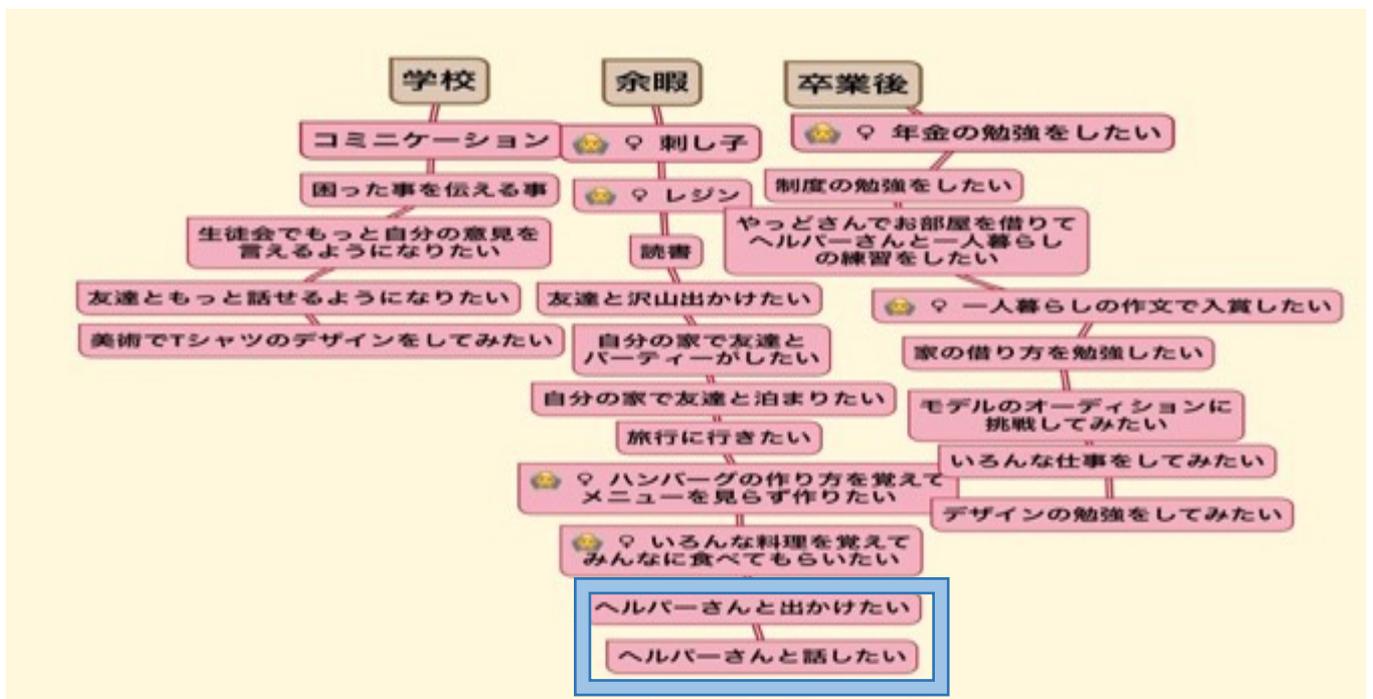


図7:やってみたいことリスト(2学期追記)

9月13日

今日、重度訪問介護士さんのヘルパーさんと初めて会いました。  
24歳のお姉さんで私と名前が同じでした。すごくびっくりしました。  
質問したり、オセロやUNOをしました。  
最初は、少し緊張しました。  
でも、少しずつなんでも言い合える関係になりたいです。

図8:Aさんの日記

○ エピソード(令和2年9月)

Aさんは9月から、重度心身訪問介護サービスを利用している。これまでショートステイ、放課後デイサービスを定期的に利用していたが、将来の生活を見据えてこのサービスを利用することになった。ヘルパーさんは偶然 Aさんと同じ名前の24歳の女性で、25歳、23歳の二人の兄がいる Aさんは、親近感をもつことができたようだ。ヘルパーさんと自宅で初めて過ごすことになった Aさんは、口頭でヘルパーさんと会話を楽しむことができ、心地よく過ごせたことを母親から報告を受けた。母以外で会話をしたことは、小学部年に転入してきて以来のことであり、母も大変喜びと成長を見ることができた。Aさんがヘルパーさんと話す予兆として、ヘルパーさんと会う前に、Aさん、母と実施者の3人の会話で母から「Aさんは、卒業したらいろんな人とお話ししようね」と話すと、Aさんが大きく頷いたことがあった。Aさんの頷く姿を見て、Aさんの自立に向けた意欲とこれまでの学習で得た自信を感じていたのだと考える。Aさんはこのヘルパーさんと初めて過ごしたことを日記(図8)に綴っていた。翌週も同じヘルパーさんが訪問することが計画されている。翌週の日曜日にも同じヘルパーさんと過ごした。ヘルパーさんと散歩をして、近所のコンビニエンスストアで買い物をし、楽しく過ごせて自分で電子マネーを使い買い物した報告が iPad の日記に記述されていた。その翌日の出来事として、昨年度末に作成したヘルパー募集のチラシを看護学校にも配布をしている。このチラシを見た看護学校の生徒から、面接の問い合わせがあり、チラシ作成の責任者である Aさん自ら面接官となり看護学校の生徒の面接を行うことができた。看護学校の生徒の授業を調整し、ヘルパーの実施の可能性が出てきて、Aさんは昨年度の取組が実を結んだことに大きな喜びを感じた。

・対象生徒の事後の変化

○ Aさんの変容の考察

Aさんは作文の応募のみならず、書いたものを多くの人に読んでもらうことに喜びを感じ、書くことへの意欲に繋がっていることへ印象を受ける。文書を綴るだけでなく、自分のことを表現し、発信することに自信をもつようになった。Aさんは話を聞いてくれる人の存在や、書いたり、話したくなったりする内容を設定し、繰り返し取り組む中で、更に懸賞品のある作文応募にモチベーションが上がったことが考えられる。自らの意思でチャレンジして、実行できたことが自信につながっていくことを、Aさん自身が実感したことが Aさんの積極的な活動に感じられた。作文を書いて応募したり、詩を書いて曲を付けてもらったりした体験は、自分を表現することを楽しむ姿が見られるようになってきた。Aさんと過ごす中で、パターン化した文章を書くことや、伝えたいことをなかなか伝えられずにいたことを課題として挙げていたが、Aさんのこれまでの経験をベースに、作文や作詞のような活動で表現することの道筋に気付いた。Aさん自身の考えや思いを、自由に表現する力に変わっていくことなればと思う。Aさん主体の生活の支援につなげたいと考える。重度心身訪問介護サービス事業所が Aさんの実態を十分考慮し、訪問するヘルパーさんとの関係作りを大切にすることの共通理解があり、Aさんの介助のニーズ等を共有していく手続きがされていた。このような安心感を含み、Aさんの新しいヘルパーさんとの出会いが、スムーズに進められている。卒業後の生活に向けて、今後、Aさんの希望や願いを、Aさんを中心にして語り合うことが大切だと理解する。当初、コミュニケーションとして

iPad 等を使用する目的で実践を始めたが、本人の意思を支援者が理解するため、また、対象生徒が意思を伝えるために活用されるべきという視点が大切であることに、A さんの成長を通して気付かされた。支援者は「はい」「いいえ」のやりとりにこだわってしまう。しかし今回の実践で、A さんの主体性、コミュニケーションが短期間で成長した理由は、A さんの意思を尊重し、その意思が A さんに伝わり A さんの意思に基づいた活動へとつながったからだと考える。このことにより成功体験や意思通りにできなかったことでも、A さんは主体的に、更に次の課題や対策を考え、乗り越えていけたと考える。A さんの意思を自ら iPad を操作して伝えることができるようになったことである。意思を伝えるためのスモールステップの計画として、「はい」「いいえ」により、分かりやすい活動の選択で成功体験を繰り返すことで、自分の意思を伝える段階まで成長したと考える。(表2)

表2:A さんが主体的に意思を伝えるようになるまで

R1 12月中旬	○ 「しゃべって」アプリで自ら興味のあることを教師に質問して楽しむ姿が見られ始める。
R2 1月	○ 日中一時利用の友達と LINE で遊ぶ約束をするようになる。
7月下旬	○ スピーチコンテストに参加したいので作文のアドバイスを実施者へ依頼し、コンテストに向けて作文を描き始める。
8月中旬	○ 作詞を始め、ノートに自分の表現したい言葉や気持ち、文章を書き留めることを楽しみはじめる、 ○ A さんが描いた詩に、宮崎市在住のミュージシャンに曲をつけてほしいことを依頼する。
9月	○ 高等部卒業後の生活を見越して重度訪問介護サービスの利用を開始する。 ヘルパーさんとの会話を楽しむことができるようになる。
10月中旬	○ スピーチコンテストの一次審査を通過する。(スピーチのための作文を審査)(図5) ○ スピーチコンテストの最終選考に向け、「プレゼンを作って発表したいので、アドバイスがほしい」と実施者へ依頼する。(図7)
11月上旬	○ スピーチコンテストで最優秀賞を受賞する。 ○ 進路支援会議にてAさん自身が考える進路やメモアプリでまとめ、一週間のスケジュールをロイロノートに入力することを実施者から提案し、A さんは会議にて出会者に伝えることができた。(図12、13)
R3 1月	○ A さんが自立支援センターのイベントのパネルディスカッションでパネラーとして依頼を受ける。スピーチやディスカッションの原稿を作成する際、実施者へアドバイス等を依頼する。(図14) ○ 隣接の宮崎県立こども療育の所長へ、センター内に A さんの自作ヘルパー募集ポスターの掲示を依頼する。(ポスターは昨年度、魔法の Wallet にて実践)
2月中旬	○ パネラーとしての原稿作成やプレゼンテーション、ディスカッションの準備を実施者へ支援を依頼する。 ○ これまで国語の題材等で履歴書を書く機会もあったが、A さん自身から「履歴書を書いてみたいので相談にのってほしい」と実施者へ依頼する。「履歴書はどこへ出すの?」と実施者の質問に、「今すぐに必要ないのだけど。書く機会が来た時のために書けるようになってほしい」と A さんは答える。

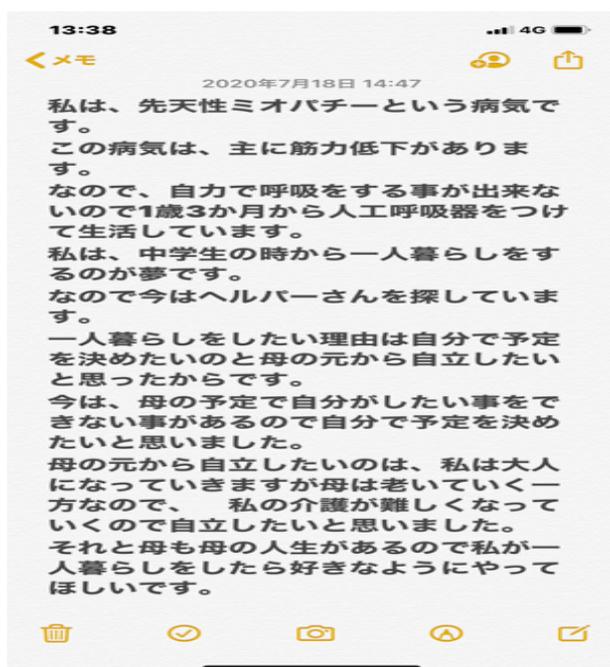
## 【報告者の気づきとエビデンス】

### 主観的気づき

・対象生徒は昨年度より自分から周囲と関わろうとする姿が見られるようになった。今年度はスピーチコンテストに挑戦し、原稿の作文の取り組みから、自分の気持ちを表現し、スピーチ方法を考え、準備等の一連の活動に挑戦した。審査員やスピーチコンテストの視聴者に、自分の思いが分かってもらえたことを実感したのではないだろうか。スピーチコンテストに向けて主催側スタッフとのやりとりから教師以外の大人とのやりとり等は、Aさんのコミュニケーションの幅を広げることに繋がったと考える。(図9)

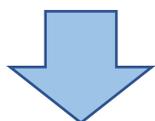
### エビデンス

令和2年7月 Aさんが最初に書いたスピーチコンテストの作文



メモ

図9:スピーチのために最初に書いた作文(推敲した作文が図5)



令和2年11月

進路支援会議にてAさんが自分の進路について語る

Aさんは、進路支援会議にて卒業後に臨む生活スタイルを文章にし、1週間の過ごし方をロイロノートでまとめ進路支援会議の出会い者に伝えることができた。(図10、11)

卒業後に向けて頑張っていることは、重度訪問介護のヘルパーさんと楽しく過ごしています。主に日曜日に来ていただいています。

重度訪問介護のヘルパーさんに来ていただくようになって日曜日の過ごし方を考えるようになりました。

これまで日中一時事業所でお世話になる方は歳の離れ方が中心でしたが、年齢の近いヘルパーさんと過ごしたり大学生と一緒に過ごしたりする経験をしました。

一人暮らしに向けてヘルパーさん募集のチラシをいろんな方にお配りしました。私のことを知ってもらえるといいなと思います。今現在の考えで卒業後の一週間の過ごし方を考えてiPadに入力しました。

その中で仕事では、洋服のデザインを勉強してそんな仕事に就きたいです。やっど宮崎では、まこさんやめぐみさんがしている仕事がやってみたいです。外出では、ヘルパーさんといろんなところに行きたいです。これから卒業後の生活で困りそうなことは、お出かけするとき、体調が悪い時、呼吸器や吸引器が壊れた時などです。

1か月のスケジュールを立てることができるようになりたいです。

支援環境を整えていきたいです。

やりたいことが実現できるように自分から行動したいです。

サービス・行政との交渉が自分でできるようにしたいです。



メモ



ロイロノート

図10:Aさんが進路支援委員会に向けてメモアプリに自分の進路についてまとめ参加者に伝えた内容



図11:Aさんの考える高等部卒業後の一週間の過ごし方



**令和3年1月 パネリストの依頼を受けて最初に作成した原稿**

自立支援プログラムを受けている自立支援センターのイベントのパネリストの依頼をAさんが受けることになった。パネルディスカッションの準備のため、事前にAさんは作文を一人で書き、入力した。この作文の校正等手伝ってほしいとの依頼をAさんから受けた。2月下旬のイベントに向けて現在、準備中である。(図14)

清武せいりゅう支援学校にかよっている高校3年の です。

この学校は、小学部、中学部、高等部が一緒になっていま 。  
先生と生徒がワンチームとなって夢に向かって頑張っている学校です。  
支援学校にかよってよかったことは、「いろんな学校と交流ができたこと」と「先生が生徒にあった進路をたくさん調べてくれること」です。交流の面では、いろんな学校の生徒と交流ができて仲良くなって嬉しかったなと思いました。勉強の面では、私は小1から小3まで地元の小学校にかよっていました。

友達ができて毎日学校が楽しかったのですが、小4年生から支援学校に転校しました。  
小4で転校して友達と離れるのは悲しかったのですが、支援学校では勉強の面で先生とマンツーマンで自分にあった勉強ができるのはよかったです。

現場実習や施設見学もたくさん行かせていただきました。  
中学部で、行った現場実習では、Tシャツ畳みときゅうりの袋詰めなどをしました。  
私は、あまりやりたくないなと思いました。  
私は、もうこの時期から将来についてやりたいことを決めていました。  
それは、ファッションに関する仕事をしてみたいという夢です。

高等部では、ホットステーション翼さんや、やっど宮崎さんなどに行きました。  
やっど宮崎さんの実習では、ピアカウンセリングをしたり、実際に一人暮らしをしている方の家にお邪魔して話を聞きました。

ピアカウンセリングでは、同年代で当事者と話す機会がなかったのですごく新鮮でした。  
最初は緊張もありましたがピアカウンセリングを受けていると緊張も解けてきていました。  
一人暮らしをしている方の家にお邪魔した時に話を聞いたら私もできそうだなと思いました。

高等部になった頃から一人暮らしをするのが夢だったのでやっど宮崎の皆さんに出会っているんな刺激をもらいました。夢や、やってみたいことが実現できるんだなと気づきました。

やっど宮崎さんに出会うまでは、一人暮らしはすぐにできるのかと思っていました。  
でも、ヘルパーさんを探したり家を探したり一人暮らしに向けて準備のはすごく大変なんだなと思いました。学校では学べなかったことをたくさん学べています。  
今、私はやっど宮崎さんの自立支援プログラムに参加しています。  
そこでは、一人暮らしに必要なお金こと、ヘルパーさんのことなどを一人暮らしをしている先輩方に教えていただいています。  
学校の友達の中には、私と同じように一人暮らしをして自立をしたいと思っている人もいます。



メモ

図12：パネルディスカッションの発表原稿（一部抜粋）

## 【Aさんの表現方法について】

### ① 高等部1年時

質問に対する「はい」「いいえ」（例：「お買い物に出掛けた？」に対して「うなずき」で答える）の会話が、Aさんの実態から適切だとして実施者は実践した。

### ② 高等部2年時

高等部1年時に、Aさんの興味・関心のある「はい」「いいえ」のやりとりを十分に行うなかで、「Aさん、どんなテレビ番組を見た？」と質問すると実施者から、「はい」「いいえ」の表現だけではない、「お母さんは、面白くないと言っていたけど、〇〇さんが出ていて、おもしろかったです。」と自分から文章表現で答えるようになった。この主体性を見て、「はい」「いいえ」だけではない表現を伸ばすことができるステップに入ったと判断し、実施者から、具体的に答えができるように「自分から土日何するの？」等の質問をするように変更した。毎日、このやりとりを繰り返し実施した。その成果が、高等部2年の2学期末にあらわれ、Aさんから実施者に質問や自分の気持ちをiPadに書いて表現するようになった。Aさんからの質問は以下の内容である。「最近欲しいものはありますか?」、「土日は何をすごしますか?」、「好きなテレビ番組は何ですか?」等 Aさんからの質問以外に Aさんは「(ヘルパー

募集のチラシに書いた言葉)話しかけられることも話すことも好き」と書いた。

### ③ 高等部3年までの成長を通して

Aさんの卒業後の自立した生活に向けた総合的な力を身に付ける取組という視点を置いていたことは重要なポイントであった。

・重度心身障害のある方々との目標設定において、本人の意思を尊重しその実現と結び付けることは、受け入れる社会生活との調整もあり難しいことがある。

・Aさんの成長は社会生活をする上で、支援者と自分なりの表現する力を付けることで支援者に伝わることをスモールステップで体験し、ヘルパー募集のチラシ作成、生徒会立候補等、様々な活動からAさんの興味・関心のある内容を提供し、Aさん自身の意思選択できたことである。障がいの程度により支援者側が判断するのではなく、障がいのある方々の興味・関心のあることからの学習により、コミュニケーション力が向上することを実施者として学ばせてもらった。

### 【今年度の実践を通して】

#### ○ 今後の展望について

#### さらなるステップの試行錯誤

・ここまで、予想以上の成長がみられ、Aさん自身が校内でのコミュニケーション、自立支援センターでのコミュニケーションについて満足しているとのことが分かった。

・Aさんの実態から、こちらから課題を設定して取り組んでいくことは、ストレスを与えてしまうことも懸念された。そこで、Aさんの成長を分析すると、特定の大人:母、実施者とのやりとりは、スムーズに行う体験を十分に積み、表現の幅も広がった。前述したヘルパーさんとの会話が、卒業後の社会生活への第一歩と捉える。今後は、家庭外、学校外での会話を楽しめる体験を高等部卒業後まで取組む段階にきたと考える。そのために、母と連携をとり、学校外での体験の際に、これまでは大集団の中で過ごすことが多かったが学校外での体験の中に、緊張とストレス軽減、集中できる環境として、ヘルパーさんと個室で、一对一の二人でやりとりする時間を設定することを試みた。この経験の積み重ねが、Aさんが卒業後に一人暮らしをしたいという大きな目標への成功体験の積み重ねとなり、自信につながると考える。Aさんに与えられた活動ではなく、Aさんが日常生活の流れで、一对一のやりとりを行うことが大切である。次のステップで支援の重要なポイントは、Aさん自らが自分の成長を感じ、さらに力を付けたと感じられるように、一对一でやりとりをしてくれる相手には、事前にこれまでのAさんの変容と本実践の趣旨について十分説明しておくことが大切であると考えた。

- ・人とのやりとりをすることの楽しさ・喜びを実感できること
- ・成長過程と指導内容を確実に引き継ぎ、主体的にやりとりをすることができる環境づくり
- ・Aさんのコミュニケーション力を支援するためのICTの活用（会話力を引出す支援具の活用）
- ・日常生活の中で、教師がAさんの興味・関心を大切にすること